

ウルリム  
響

# 響

聖公会生野センター機関誌

第29号

2003年11月15日発行

題字：康秀峰

E-mail: ikuno@nssk.org URL <http://www.nssk.org/province/ikuno>

## 精一杯の祈りを込めて

松原 栄

この度、聖公会生野センターの運営委員長に選ばれてしまいました。歴代の委員長の名前に、改めて引き受けるのではなかったと悔やんでいます。向き不向きで言えば不向きですし、力量もありませんが、引き受けてしまった以上は、出来ないなりに精一杯関わりたいと思っています。よろしくご指導ください。

高校時代に数名の在日の友人があって、在日の人々に何の違和感もありませんでした。

聖公会神学院を卒業して最初の赴任地は母校の桃山学院中・高でした。よく張本栄司祭が来られ、親しくお話をする機会が多く、またご夫人をはじめご家族の方々とも親しくさせていただきました。教会にも何度かお手伝いにお伺いしました。その時にいただいたキムチのおいしかったことは、忘れられません。

でも、初めて韓国の土を踏んだ1984年10月、降り立った金浦空港で、眼に入る文字、耳に入る言葉が全くわからず、取り付く島が無いと言う悲しい現実と直面しました。欧米を旅した時は、なにかわかる気がしたのですが、直ぐ隣りの国でこれでは、私たちの何かが間違っていると思いました。

これは衝撃的な体験でした。そして、参加した第一回日韓聖公会宣教セミナーは、さらに衝撃的でした。戦前戦中の日本聖公会の犯した幾多の罪の厳しい指摘と糾弾でした。勿論、準備の勉強で、ある程度は理解していたつもりでしたが、現実はそのような甘いものではありませんでした。そして日韓問題の知識と意識の浅さと不十分さを厳しく知らされました。これは、大きな体験でした。それまでも、日韓関係の集まりに出る機会があって、問題の厳しさを知っていたつもりでしたが、根底的に打ち砕かれました。



指紋押捺、外国人登録法等の問題で、合田悟牧師（日本自由メソヂスト教団）らと出入国管理局の代表の方々と話し合ったことがあります。その時、指紋押捺拒否のために、アメリカ留学中の方が再入国拒否で母上のお葬式に出席できなかったこと、また押捺拒否のため再入国拒否を言われて、新婚旅行のハワイ行きをとりやめた知人の悲しみなどを取り上げて、このような非人間的な扱いをする国の現実に、日本人であることが恥ずかしいと言った時、代表の方に厳しい目を向けられたことも心に残っています。

共生社会の一端を担う聖公会生野センターの働きも、10年という区切りを迎え、新たな展開に入ろうとしています。与えられた使命を担うべく、精一杯の祈りを込めて歩んで行きたいと思っていますので、よろしくご支援ご協働くださいますように。

(まつばら・さかえ 日本聖公会大阪教区芦屋聖マルコ教会牧師・聖公会生野センター運営委員長)

### もくじ

1. 精一杯の祈りを込めて
2. 時のしるし 個人と国家、そしてキリストの福音
3. 多民族・多文化共生のすすめ⑧  
メディアによらない豊かな朝鮮半島観を
4. 韓国市民の眼⑧ 韓国「在外同胞法」、遺憾
5. こんな本あります  
本から「在日コリアン」を考える⑩
6. 投稿 全泰壹の死は韓国労働運動・学生運動・  
民主化運動の先駆けとなった
7. 詩 「言葉の味覚を失くして」
8. 読者の声 第28号アンケートより  
生野のまちかど よいごま油安く売ります
9. クリンもだん絵画展 アートの力
10. 写真と日誌でつづる聖公会生野センターの活動
12. お知らせ 余韻

「ドイツにおける現在の国家の動きは、今までとは全然その事情を異にしてきた。どこが異なってきたかと云えば、それは現在の新しい国家、即ち現在のナチスの国家は、人間の存在全体を統制する権利を要求すると云う点にある。今までの国家組織はその根本においては、一個人としての私的な人間を完成することを目的としたに過ぎなかったが、しかしこれはよく考えて見れば、国家が非国家化することであった。これに反して現在では、国家と云うものは、人間の存在の一部をつくっていると云うようなものではなくして、人間の存在の基礎であり土台であって、それなくしては人間個人の存在はあり得ないと云うものとなり、従って人間の存在全体はその基礎である所の国家によって影響されずにはいられないと云うことになってきた。しかして個人主義と自由主義とが主張される所ではまた、民族から、国家から、家庭から解放されようとする動きが起こってきて、しかしてそれは結局においては人間の存在の土台から解放されようとする恐ろしい危険と矛盾とに陥るのである。人々は今やこの危険を明白に感じてきた。しかしてその結果としてドイツでは国家社会主義の運動が起こってきたのである。」

大変長い引用となったが、この文章は1942年に日本で行われた講演の一部である。「個人」と「自由」を基軸とする近代民主主義というものが人間の土台である「国家」を危険に陥れるものと批判し、そのような危険な状況を克服する国家社会主義を打ち立てるナチズムを積極的に肯定する演者は、単なる当時の国粹主義右翼ではない。この講演（『基督教週報』第82巻第4号に収載）を行ったのは、日本聖公会の聖職であり、立教大学において長年文学部長という要職にあった人物である。私は現在、「立教学院と戦争」という立教大学内における研究作業に携わっているが、その過程でどうしても避けて通ることのできなかつた

事実の一つである。現在の視点から、私たちの先達を批判することには時に慎重にならなければならないこともある。しかし、この講演が、ナチスの国家主義が人間本来の姿であり、個人の権利や自由を国家に埋没・従属させることこそが「キリストの福音」であり、「聖書の真の意味」であると結ばれる時に、私たちにこれを無視して良い選択肢は全く残されていないのである。

彼は、別の記事においては、それゆえに日本のキリスト教は世俗国家の国民道徳、すなわち天皇制国家の臣民の道に従属しなければならないと「神学的」に展開する。天皇制国家や警察権力の圧力により、やむなく「皇国聖公会」の道を進まざるを得なかったのではなく、むしろ自らが積極的に天皇制国家主義へと邁進しようとした痕跡がここにはあると言わざるを得ない。私が敢えてこのような事実をここに書き留めるのは、私たちキリスト者が、私たち聖公会に属する者が、二度とこのような誤った判断をしないためである。9・11以降の世界各地において、「個人の権利と自由」の「国家」による収奪が急速に進んでいる。また、日朝首脳会談が行われた昨年の9・17以降、いわゆる「拉致問題」をめぐる、実に気分の悪い「国家主義」的雰囲気蔓延している。もちろん、「拉致」そのものが、国家による個人の権利の破壊であったことは間違いない。同時に、日本は戦中そのような強制的拉致行為を朝鮮半島をはじめとするアジアの民衆たちに対して行ったことを忘れてはならない。

今・この時代の中で、私たちは「キリストの福音」とは、一人ひとりの個人の尊厳と自由を守りきるものであること、そのような権利を国家が侵害する場合には、徹底してそれに立ち向かわなければならないことを、しっかりと確認したいのである。

（にしはられんた・中部教区司祭、立教大学教員）

## 個人と国家、そしてキリストの福音

西原廉太

## メディアによらない豊かな朝鮮半島観を

金光敏

日本の学校教育において民族教育を保障していくために超えなければならない障壁がいくつかある。まず、在日韓国・朝鮮人と日本人との関係における階層問題である。

在日の保護者たちからの聞き取りでよく耳にするのが、学校側に子どものことで相談に行った際、「お母さん、安心して下さい。わが校に差別はありません。みな平等に教育しています」等々の答えが返ってきたというケースである。学校側は保護者を安心させようと発した言葉であろうが、逆に保護者の側がより心配になったというもの。

保護者たちは、子どもが他とはちがう背景を持っていることにしっかりと目を向け、子どもが萎縮せず学校生活を送れるよう取り組みを進めてほしいと要請しに行っている。が、学校側は、韓国・朝鮮人としての独自性を認識してほしいという保護者の思いに無感覚で、ただ「平等に教育する」を繰り返すだけで、まったくその言葉がもたらすマイノリティへの意味について認識が不足している。その場合に出てくる「平等に教育する」なる言葉の聞こえはいいが、「平等」の名のもとに、ただ民族的マイノリティをマジョリティたる日本人として教育するという同化主義以外の何ものでもない。

一方、韓国・朝鮮人を日本人よりも低位に見ていることも否定できない。すなわち、日本人として扱ってあげる方が韓国・朝鮮人のためだとの思い込みである。このことから指摘できることは、単純な誤解や偏見を超え、実は、在日韓国・朝鮮人に対する差別問題は、日本社会における階層問題とも深く結びついている。こうした朝鮮半島出身者を低位に見る意識は、日本の軍国主義時代、朝鮮への植民地支配期に徹底されたものであるが、その払拭の難しさが見えてくる。

日本の学校教育における民族教育の保障のため

に、何よりもその現場従事者たる教員たちの朝鮮半島観がどうであるのかが重要である。すなわち、教員が韓国・朝鮮人をしっかり認識するために、朝鮮半島をどのように認識しているのかという問題である。とどのつまり教員たちの教壇で語る朝鮮半島観とはどんなものかという問いである。

私は、学校現場に従事する教員たちの朝鮮半島観があまり豊かでない実態を知っている。

というよりも、教員とて日本社会一般が持っている価値観や偏見から決して自由ではないということだ。教員が子どもたちに語る「朝鮮半島観」が、実際にメディアに左右されることは多くないか。いや教員たちが語る朝鮮半島観のほとんどがメディアに頼っているといても過言ではないかもしれない。メディアと同じ論調で北朝鮮問題を子どもたちに語っているケースは多い。

メディアは巨大な資本であり、視聴率競争に勝ち残るという使命を帯びている。こうしたメディアの背景を無視し、信じ込み、そして語られ、子どもたちの朝鮮半島観として再生産されていく。

多分こうした朝鮮半島観を持って育った子どもたちは、将来出会うことになるだろう朝鮮半島の人々、いやすでに出会っているだろう在日韓国・朝鮮人と果たしてどんな対話をし、関係を結ぶのだろうか。

教育職に従事する教員たちこそ、メディアによらない自らの経験に裏打ちされた朝鮮半島観を持つべきだ。教育は、差別や偏見を絶つための手段なのだから、朝鮮半島観を持つときは、できるだけ肯定的で、豊かなものを意識的に探し出す努力が必要だと考える。私たちの運動が担う役割は、経験を裏打ちできる韓国・朝鮮との出会いを提供していくことだ。いろいろいっしょに取り組んでみましょう。

（きむ・くあんみん 民族教育文化センター事務局長）

## 韓国「在外同胞法」、遺憾

姜惠楨

私はおそらく韓国に暮らす人々の平均よりは、在外コリアン、とりわけ在日コリアンとの出会いを多く経験している部類であろう。日本での長期在住、韓国での現在の仕事や活動を通して様々な立場の在日と出会いながら、その個々の多様な背景と考えに触れることができた。だが、そんな多様性の中でも彼・彼女らに共通して言えることがあるのではないかと。私は在日コリアンに対する韓国政府のあり方について、肯定的評価を下す在日当事者と出会った記憶がない。

当たり前だ。実際、良いことなど何もして来なかったのだから。在日コリアンが朝鮮半島南の韓国に対し好意的であり得るとしたら、それは自らのルーツや故郷、土地、人…などへの様々な思いからであって、別に政府がよくしてくれたからではないだろう。在日を切り捨てた韓日国交正常化の1965年にさかのぼるまでもなく、韓国政府は現在に至るまで在日に対し棄民政策で一貫し、一方では「誇り高い韓国人になれ」ばかりを呪文のように繰り返してきた。国際化が叫ばれはじめた90年代初め頃からは、ユダヤ民族や華僑の例を類りに取り上げ、世界中のコリアンが祖国の経済発展にいかんにか貢献すべきかを強調してきた。

統計の取り方によって誤差はあるようだが、現在、コリアンは世界152ヶ国に700万人がいるとされ、その数は韓国人口の約15%に及ぶ。現在、その人々への政府政策の根拠となっているのは、1999年9月制定の「在外同胞法」である。この法については当初から批判が強く、違憲確認のための

憲法訴訟請求が憲法裁判所に提出された。特に問題となったのは第2条「外国国籍同胞」の規定。大韓民国政府の樹立前に朝鮮半島から移住した同胞とその子孫、在中220万、在CIS50万、朝鮮籍の在日、在サハリン数十万など、約300万が排除されたのである。

憲法裁判所はこのことが憲法11条「平等の原則」に反するとして、2001年11月、「憲法不合法」(違憲の一種)判定とともに、現行法は2003年12月31日までの暫定的適用との命令を下した。国内の市民団体は、在外同胞規定を韓国政府樹立前に移住した外国籍同胞や無国籍同胞にまで広げるべきとして改正運動に取り組んできた。だが、政府は憲法不合法判決から2年経った今も改善の意志を示しておらず、不十分な現行法さえ12月末で廃棄となる恐れがある。

二重国籍が認められるならともかく、在外同胞法の存廃や改善の可否が在日社会に実際に与える影響は少ないのかもしれない。また、世界中のコリアン・ルーツの人々を血統主義に基づいて韓国に取り込む必要もない。だが、法改正をめぐる政府の誠意のなさが腹立たしいのは、この国が最低限すべきこと、できることを実行する意志のなさが、そこに見て取れるからである。

様々な状況の在外コリアンが、自らに連なる民族的事柄をめぐって何かに取り組もうとするときや、韓国が外交を通して在外コリアンの居住国政府に働きかけることができる場面でも何もしないとしたら、それは重大な責任放棄ではないか。ソウルを訪れた在日の辛淑玉氏は、昨年9.17以来の在日への暴力に対し沈黙で一貫しているこの国は一体どんな国家かと、批判の問いかけを投げた。無能で犯罪的な国家だとしか答えようがない。その国家を支えている韓国の私たちもまた、責任を免れることはできないだろう。

(かん・へじょん 日本の教科書を正す運動本部  
(アジアの平和と歴史教育連帯) 国際協力委員長)



韓国の国会本会議場

## 本から「在日コリアン」を考える ⑮

高二三

### 日本のなかの世界

—つくられたイメージと対話する個性



原尻英樹  
定価1500円+税  
新幹社

いま、日本は多民族・多文化社会。さまざまな人々が暮らし、さまざまな世界がある。

日本人でない、という明確な結論のもとにありながら、疎外感についてはなれなかった。日本で成長するということは、どこかで日本人でなければダメなんだ→日本人になりたい、という気持ちがあったのだろうか。

大学生になって民族運動とかかわったが、前段に述べた裏返しか、ことさらに自分が韓国人であることを強調していた。何の疑問もたず、喜んで太極旗の前で胸に手を当て韓国の国歌・愛国歌を歌っていた。

現在、若かりし頃の自分と同じことができるだろうか、と考える。たぶん出来ないし、出来たとしても胸の内の思いがずいぶんと変容している。アイデンティティーを国家や民族に求めた結果だったが、在日朝鮮人である私たちは、日本国からも大韓民国からも朝鮮民主主義人民共和国からも規格外の存在で、国家の概念からすると疎まれてる存在なのである。

疎まれたからこそ、強い愛がめばえたのかもしれない。そのまえに、国家や社会が作り上げた「イメージ」があって、知らず知らずそれに乗せられて来たからこそ起きた現象であった。

さて『日本のなかの世界』の話をしなければならぬ。

この本は、ある隠岐に住むおばあさんの話から始まって、大阪市生野区、横浜中華街、大阪市大

正区、群馬県大泉町(すべてが日本にとって異文化をもつ人々の集住地域)をめぐるお話の本である。単なる紹介本であるように見えながらも、いままでもあまりふれられてこなかった視点が提示されている画期的な本になっている。

幕末の日本人知識人たちは、まず自分たちに迫ってくるものを「西洋」ととらえ、次に自分たちを「東洋」ととらえ、そしてさらに「日本」を意識するようになったと言われている。ことほどさように、他者を規定することによって自身を認識することが可能となるのである。

現代日本はどうであろうか。たとえば、日本人が外国人と日々、普段のこととして仲良く暮らしていることはニュースにもならず、いさかや犯罪ばかりが報道されている。その結果、つくられていった外国人のイメージは、日本に住んでいる外国人の実態を正確にとらえているといえるか疑問だ。

さらに問題なのは、そのつくられた外国人像と「鏡合わせ」で日本人像、日本ナショナリズムが作られていっている点である。日本国・日本社会がメディアや教育、既成の古い価値観を総動員して、日本国に好ましくない外国人像をつくりあげている。それに踊らされて新たな日本ナショナリズムが再編されるのである。

これは編集子の思い込みで、本の中ではそれはことさらに強調されてはいない。なんでもない普段着の生活をしている日本人と在日外国人の暮らしや、その人々の関係性をずっと見続けている。そして40年も50年も変わらず外国人とつきあい続けている人々の生き方や方法に、日本が多民族・多文化の社会をつくり上げていく可能性があると思っている。

それらの庶民たちは「単一民族国家」が「神話」であることを、とうの昔に見抜いていたのである。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『日本のなかの世界  
—つくられたイメージと対話する個性』は  
聖公会生野センターで取り扱っています。  
TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357  
e-mail : ikuno@nssk.org

## 言葉の味覚を失くして

丁章

あの日  
日本語の味覚を  
失くした

それまでの日本語のすべてが  
にわかに味気のないものに  
変わってしまった

そしてむさぼるように  
かぶりついたウリマルも  
はなから味覚を与えられていないから  
味わいもなく咽もとを  
通り過ぎてゆくばかりで

感覚や嗜好が剥がれおちた日本語と  
無機化学により獲得したウリマルで  
こしらえた料理を口にして  
どうにか生きながらえている  
そんな料理をふるまってみて  
うまいとだれかがよろこんでくれたら  
しあわせだ

ウリマル—우리말。自民族語(朝鮮語)。  
詩集「マウムソリ—心の声—」より

丁章 (ちょん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生  
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業  
現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)  
詩集『マウムソリ—心の声—』(新幹社)

『民族と人間とサラム』と『マウムソリ—心の声—』は  
聖公会生野センターで取り扱っています。

## 全泰壹の死は韓国労働運動・学生運動・民主化運動の先駆けとなった

堀 千穂子



## 全泰壹評伝

(チョン・テイルひょうでん)  
趙英来著・堀千穂子ほか訳  
定価2,800円+税  
つげ書房新社

1970年11月13日、ソウルの平和市場前の通りで一人の若者が自らの身体に火を放ち、「われわれは機械ではない！」

「労働基準法を守れ！」「僕の死を無駄にするな！」と叫びながら、抗議の焼身自殺を図った。その人の名前は、全泰壹。数え年で22歳の青年労働者だった。

1948年に全泰壹は大邱で被服縫製労働者の長男として生まれた。解放後の混乱、そして朝鮮戦争と激動の歴史の中で全泰壹の一家も避けて通ることができなかった極貧の日々。韓国経済発展の基礎とも言える繊維業界の過酷な労働実態の中で、全泰壹は雇用主からぼろ雑巾のように扱われる幼い少女たちをかばい、ままたらぬ現実にも肉体的にも精神的にも追いつめられていく。しかし、全泰壹は絶望の淵に立たされながらも真実を見極め、謙虚に誠実に厚い社会の壁に立ち向かっていった。

全泰壹の死は、当時、朴正熙軍事独裁政権下にあった沈黙を強いられていた民主化運動、学生運動、労働運動に衝撃を与え、その後の運動に大きな影響を及ぼした。33回目の命日を迎える今年も11月9日にソウルにおいて、3万人もの市民、労働者、学生らが集い夜を徹して集会が開かれるのを見るとき、全泰壹が決して過去の人ではなく、いまもその精神が脈々と受け継がれていることがわかる。

本書は、貧しくて学校にもろくに通えなかった幼年時代から、世間のあらゆる辛苦を舐めながら成長した労働者全泰壹の生涯と闘いを本人の日記やメモを元に趙英来氏(故人)がまさに命を削っ

て書き上げた評伝である。

また本書は、圧制下にあった韓国から日本に持ち出された原稿が、『炎よ、わたしをつつめ』(たいまつ社)として、1978年にまず日本で出版され、その後1983年に韓国で出版された。今回日本で出版された『全泰壹評伝』は、2001年9月に第2次改訂版として発行されたものの訳出である。このように本書は生まれながらにして日本と韓国を深く結びつけていた。四半世紀を経て本書がさらに日韓交流の一助になれば翻訳者一同、これ以上の喜びはない。

この度、出版を記念して、韓国労働運動の母といわれる李小仙オモニと、全泰壹氏の意志を継ぎ、韓国女性労働者の指導者である妹の全順玉さんが来日されることになった。東京と大阪で講演会と歓迎レセプションが下記のように開催されるので、多くの皆様の参加をお願いしたい。

(ほり・ちほこ 翻訳者)

■東京 『全泰壹評伝』出版記念講演会  
オモニ 李小仙さん、妹 全順玉さんが語る  
全泰壹の生と闘い  
11月22日(土) 午後1時～午後5時  
シニアワーク講堂(飯田橋) 03-5211-2306  
参加費 1,000円

『全泰壹評伝』出版、李小仙さん、全順玉さん  
来日記念パーティ  
午後6時～8時 小石川後楽園涵徳亭  
03-3811-3015

■大阪 全泰壹氏焼身決起33年大阪の集い  
11月23日(日) 午後2時～  
PLP会館(天神橋3丁目)  
第1部  
オモニ 李小仙さん、妹 全順玉さんが語る  
韓国労働運動の足跡  
午後2時～5時 参加費500円  
第2部 歓迎レセプション  
午後5時半～7時半 参加費3,000円

問い合わせ つげ書房新社  
東京都文京区小石川1-14-1  
TEL 03-3818-9270

## 울림 28号アンケートより

いつも機関誌ウルリムをお読みくださりありがとうございます。ご感想やご意見・ご質問をいただけるウルリムであることをうれしく思っています。これからも、このように読者の声を紙面に反映して、響きあえる活動にしていきたいと思っています。

「울림」第28号をお送りくださって、有難うございました。金光敏様の「本当に差別は未然に防げなかったのか」を読み、新聞で簡単にしか知らなかった差別手紙事件の実態を知りました。日本社会の排外主義の風が相当に強くなっているのを危惧します。(萩ルイ子) ◆拉致問題については、日・朝・韓3者の市民が考えなければならず、同時に、日本人は過去の強制連行・植民地支配等についても目をそらしてはならない。それぞれを国家犯罪と認め合い反省すべきである。万景峰号の入港に際しての抗議行動は残念だが、北朝鮮当局も、拉致問題・工作活動等に誠意ある対応をすべし(今西益一) ◆いつもありがとうございます。在日フィリピン人の特集をまたしてください。外国人が日本で生活する上でやはり様々な苦勞があると思います。私たちクリスチャンはそういう苦しみに目を向けるべきだと信じています。(緒方貴子)

◆20年程前まで勤務していた私立女子高校には毎年何名かの韓国籍の生徒がいました。本名を名乗っていたのは1名だけでしたが、級友からも親しまれ、多くの先生も本名であることに一種の敬意を払っていました。韓国籍生徒への差別的意識はなかった(少なかった)ように思っています。私の担任した中に1名だけ「韓国人の間でひどい差別があった」ことを語った者がいて驚いたことがありました。また彼女は級友が帰化人であることも教えてくれました。私たちより強く意識していた問題だったのでしょうか。(松居勲) ◆常日頃思うのだが、日本で言われる「愛国心」はどこかおかしい。本当に自分の国を愛し、誇りを持つ人なら、他の国や民族、他国の人をも同様に愛し、尊重することができるはずではないのか。保守勢力の言う「愛国心」は、歪んだナルシズム(自己愛)に思えてならない。(橋本山吹)

今回のアンケートでは、聖公会生野センタースタッフに対する脅迫状まがいのものが、一通とどきました。日本社会における“共生”を願って働いている聖公会生野センターとして、これに対して次号のウルリム紙面で応えていきたいと思っています(呉光現)

## 生野のまちかど



## よいごま油 安く売ります

在日韓国・朝鮮人の暮らす街・生野。中でも済州島出身者が多く、暮らしの中でも済州島の言葉が息づいています。聖公会生野センターのすぐそばの油屋でも、済州島の言葉で大きな看板を出しています。先日、生野に残る済州の文化と言葉の調査には済州大学から研究者が訪れました。日本の社会に囲まれながらも、暮らしの中に故郷の言葉と文化のいとなみが続いています。(すずき)

## アート の力

服部 樹美

水曜日の午後7時「こんばんわぁ」親と一緒に来る生徒、ヘルパーと一緒に来る生徒。いつもの顔ぶれが集まってきます。画用紙やキャンバスに向かい、さて開始。黙々と描き始める生徒、おしゃべりが進んで絵は進まない生徒、一人ひとりさまざまです。誰かが休むと「今日は〇〇さんは？」と寂しく感じます。絵を描く時間は1時間半弱で、時間はあっという間に過ぎていきます。

だれでも通える絵画教室ということで1993年から始まった聖公会生野センターの絵画教室は、現在、障害者・在日・健常者、年齢も7歳から25歳とさまざまな生徒が10名近く通っています。障害のある人もない人も一緒に学んでいる事はこの絵画教室の特色のひとつです。また2000年からクリンもだん絵画展を開催し、それをきっかけに個展を行った生徒もいます。今ではグループ展を開こうという話も進んでいます。絵画教室としてではなく、生徒一人ひとりの名前が社会に繋がっていくことをこの教室では願っています。

私が、絵画教室にボランティアとして関わり始めて2年になります。絵のことはまったく分からない状態から始めたので、最初はとまどいを感じたものです。でもすぐに仲良くなれたなれた生徒もいれば、コミュニケーションをとるのが難しかった生徒もいます。でも毎週顔を合わせることで、一人ひとりとそれぞれのタイミングで「コミュニケーションが取れた」と感じる事ができた時、私もこの教室の仲間の一人として認めてもらえたんだと、嬉しく思いました。また一人ひとりの絵もこの2年間で確実に上達しています。絵に対する態度も変化して、以前よりも楽しく描いているなぁということも感じます。絵の事や生徒との関係も含めて、小さな変化から大きな変化まで多くの変化に出会い、それが私の喜びとなり、絵画教室に通う原動力となっています。



今年4回目のクリンもだん絵画展を開くのと同時に、初めての試みとして、シンポジウムを開催します。タイトルは「障害者がアーティストになる方法」です。シンポジウムを開くにあたって、春頃からスタッフでいろんな話を積み重ねてきました。その中で強く印象に残っているのは、「アートには人と人をつなぐ力がある」という言葉です。私はこの言葉に惹かれ、アートの魅力を新たな思いで再確認しました。私たちは絵画展を重ねシンポジウムを行うことによって、一人一人が社会と繋がり、またそこからより多くの人と繋がっていかれたらと願っています。また自分の絵がいろんな人に見てもらえる。その実感も生徒に感じてほしいと思っています。生徒たちは今絵画展を目前にし、一生懸命絵に取り組んでいます。一人でも多くの人に見に来てほしいです。そして今、私も生徒にまじって油絵を描かせてもらっています。自分で描く事により、絵の難しさから楽しさまで、生徒の気持ちを少しでも体験できた気がしました。今回の絵画もスタッフの立場だけでなく生徒と同じ立場でも一緒に感じる事ができることを嬉しく思っています。

私はこの絵画教室が好きです。一人一人が楽しんでこの絵画教室に通ってくれる事、また一緒に絵を描く仲間が増えることを願ってやみません。

(はっとり・きみ 絵画教室ボランティア)

## 写真と日誌でつづる聖公会生野センターの活動 (2002年11月～2003年10月)

### 11月

- 4 丸木美術展シンポジウム (仁寺アートプラザ・ソウル)
- 15 こみち寄席 (第62回)
- 17 第9回ガブリエル感謝祭
- 18 第3回クリンもだん絵画展 (～23)
- 21 聖公会生野センター運営委員会 (第3回)
- 22 拉致報道抗議記者会見・シンポジウム (参議院議員会館)
- 29 千龍夫氏 (元ハンセン病療養者) と会食

### 12月

- 2 朝日新聞論座取材
- 4 HIT常任理事会
- 15 民族教育ネットワーク世話人会・送年会
- 〃 生野作業所運営委員会
- 17 韓国語教室忘年会
- 18 韓国実習生通訳 博愛社
- 22 拉致報道抗議・大阪集会 (クレオ大阪中央)

### 1月

- 3 竹田主教訪問 (群馬県・榛名)
- 16 四国学院社会福祉学科授業 (香川県・善通寺市)
- 20 大阪教区後援会常任理事会
- 25 大阪教区後援会理事会
- 29 曹智鉉氏 (写真家) と懇談
- 〃 精神障害者の生活の場作りを進める会新年会

### 2月

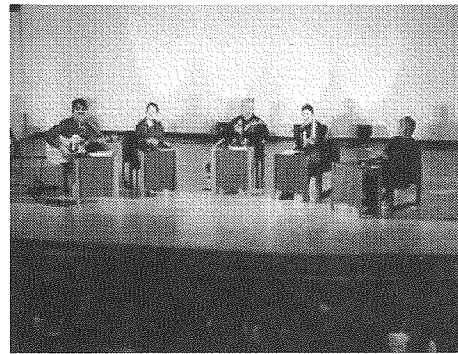
- 3 博愛社実習生通訳
- 6 大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会
- 9 精神障害者医療監察保護法案反対集会 (東京)
- 12 精神障害者グループホーム要望書提出 (大阪市役所)
- 20 韓国・テファ泉の湧く家大阪訪問 (～24)
- 27 玄月氏 (作家) と懇談

### 3月

- 4 八木府議会議員・民族差別発言抗議行動 (大阪府庁)
- 15 関東3教区生野研修
- 16 10周年記念イベント 東西五人囃子 (大阪女学院)
- 19 桃山学院生野地域活動現場訪問
- 20 HIT事務局会議
- 23 民族学校大学受験資格要求緊急集会
- 25 韓国語教室鄭恵先先生送別会



クリンもだん絵画展  
11/18-23 應典院

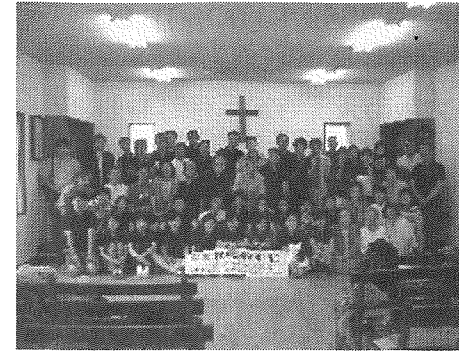


10周年記念イベント 東西五人囃子  
3/16 大阪女学院

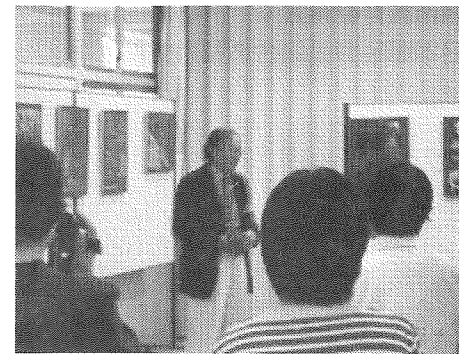


韓国語教室  
毎週火曜日 19:00～20:30

## 聖公会生野センターの活動 2003年10月



日韓青年交流プログラム  
8/7-13 北海道



写真集「猪飼野」写真展  
10/2-6 御幸森小学校



絵画教室教室  
毎週水曜日 19:00～20:30

### 4月

- 8 韓国語教室新年度開講 (毎週火曜日)
- 9 絵画教室新年度開講 (毎週水曜日)
- 11 済州島43事件55周年慰霊祭 (東京)
- 12 多摩全生園訪問
- 13 川越基督教会教会教会学校にてお話
- 28 多摩全生園金奉九氏センター訪問

### 5月

- 13 保育士学習会
- 16 写真集「猪飼野」写真展 (～19・東大阪市民会館)
- 24 写真集「猪飼野」出版会
- 29 桃山学院高校宗教講話

### 6月

- 1 教育基本法改悪反対集会 (クレオ大阪南)
- 〃 上杉聡氏・生田茂夫氏センター訪問
- 5 第1回運営委員会
- 7 大阪教区後援会常任理事会

### 7月

- 4 生野社会福祉協議会よりスタッフ来訪
- 17 「チェルノブイリの祈り」公演
- 22 大森明彦神学生実習 (～8/13) 生野地域・北海道)
- 23 ウリソダン泊旅行 (～24・三重・美杉・伊賀上野)
- 〃 済州道女性特別委員会在日1世聞き取り調査 (～28)

### 8月

- 1 韓国福祉財団 青少年交流 (生野地域)
- 7 日韓聖公会青年交流プログラム (～13・北海道)
- 19 韓国語教室焼肉パーティー
- 22 在日高齢者支援交流会

### 9月

- 11 マイケル (・ヒーラー) 神学生訪問
- 20 保育園運動会
- 23 性とジェンダーを考える集い参加
- 24 日本精神障害リハビリテーション学会参加 (～27・長崎)
- 29 HIT・大阪市行政交渉

### 10月

- 2 「猪飼野」写真展 (～6・御幸森小学校)
- 12 大阪教区礼拝「猪飼野」写真展示 フィールドトリップ
- 13 ソウル出張 (～15)
- 19 日韓保育交流 (～11/1)
- 20 パンソリの会 (アラン食堂)

## お知らせ

第4回  
應典院 WALL GALLERY  
2003年11月30日(日) から 12月6日(土)  
11時から19時 最終日17時まで

シンポジウム「障害者がアーティストになる方法」  
2003年11月30日(日) 14:00～ シアトリカル 應典院



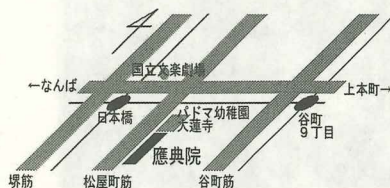
## 第4回 クリンもだん絵画展

2003年11月30日(日)→12月6日(土)  
11:00→19:00 最終日17:00  
應典院 WALL GALLERY

## シンポジウム 障害者がアーティストになる方法

2003年11月30日(日) 14:00→16:00  
シアトリカル 應典院

應典院 大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
TEL06-6771-7641



地下鉄・近鉄日本橋駅より⑧出口東へ徒歩6分  
地下鉄谷町9丁目駅より③出口西へ徒歩8分

主催・事務局 聖公会生野センター

協力：應典院

後援：大阪市教育委員会

全日本郵政労働組合堺和泉支部

## お詫びと訂正

ウルリム28号読者の声欄のお名前が誤っていました。お詫びし訂正いたします。

誤) 松井勲 → 正) 松居勲

## 余韻

今年3月に在日1世のオモニ(母)を天国に送った。苦勞苦勞の人生だった。葬儀の日、1945年に単身渡日したオモニの子、孫、その連れあい達、そしてひ孫まで含めると39人になっていた。10月に猪飼野の写真展を猪飼野の真ん中の御幸森小学校でおこなった。ある1世のハルモニ(おばあさん)が段ボールを集めている写真を見ながら「この頃は毎日、今日は死のうと思って段ボールをひらっていたなあ」とつぶやいたその姿にオモニの姿を見た。オモニの墓作りの相談にオモニの故郷である済州島に行った。いとこの兄さんと散歩しながら小さな船着き場に出た。「おまえのオヤジはここから船に乗って日本に行ったんや」と聞いた。胸にきた。未来は過去を通さずには語れない!再度、46歳の秋に思った。(ぴっくあんちゃ)

### 聖公会生野センターへのご支援をお願いします

#### ◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

#### ◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 U F J 銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：松原 栄

編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。